

透析施設最前線

医療法人社団瑞穂会 みずほ病院

- 理事長：越野慶隆先生
- 院長：能登稔先生
- 開設：2011年11月13日
- 病床数：79床
- 所在地：石川県河北郡津幡町字湯端422-1



18年間の実績をベースに透析施設のない地域に進出 連携先と支え合い、腎不全患者の療養を長期にわたりサポート

医療法人社団瑞穂会みずほ病院は、1993年から金沢市内の越野病院で透析医療を行ってきた越野慶隆理事長が、透析施設のなかった津幡町のニーズに応じて2011年11月に開院した。広々とした血液透析センターで地域の患者に対応しているほか、79床ある療養病床では、通院や在宅生活が困難な透析患者を中心に広域の医療機関から受け入れ、終末期まで含めた療養生活をサポートしている。前方、後方双方の連携を大事にし、密なコミュニケーションによって、その存在感を高めている。

沿革

1993年に透析医療をスタート
2011年、透析に特化した病院を開設

JR金沢駅から2kmほど離れた幹線道路沿いにある もりやま越野病院は、内科と人工透析を中心とした病院だ。この もりやま越野病院に1993年から勤務し、透析室を立ち上げ、県内全域から患者の集まる透析施設に成長させたのが越野慶隆・医療法人社団瑞穂会理事長である。これまでの実績をベースに、2011年11月には金沢市の北西に位置する石川県・津幡町にみずほ病院を開院。79床の療養病床を持ち、通院も在宅生活も難しい重度の腎不全患者などを入院医療で支えている。越野理事長によれば、ここでは内科一般外来や専門外来も行っているが、99%は透析患者だ。いまではこのみずほ病院が本院、越野病院は もりやま越野医院となり、サテライトクリニックと位置づけている。



越野 慶隆 理事長

「当法人を利用されている透析患者さんは現在、みずほ病院が約200人、サテライトが約40人で計約240人です。透析室スタートから20年で240人ですから、入れ替えはありながらも、ちょうど月に1人ずつのペースで患者さんが増えてきた計算になります。ここまで成長できたのは、地域の医療機関や患者さんに信頼していただけたからだと思っています」と越野理事長は感謝する。

病院を開設した背景には、もりやま越野医院の患者数が増えて施設全体が手狭になったこと、アメニティを含めた療養環境が時代のニーズにそぐわなくなってきたことなどがある。また、開業場所として津幡町を選んだ理由は、「この地に透析施設がなかったから」（越野理事長）と明快だ。

津幡町は名所・旧跡が数多く残る魅力ある町だが、もりやま越野医院とみずほ病院とは約10kmの距離があり、「組織運営という意味ではもう少し近いほうが、都合が良いのは確か」と理事長は言う。それでも、もともと石川県全域の患者を対象としてきたため、これくらいの距離なら大勢に影響はないと判断した。「何よりも、たくさんの患者さんがいて、その多くが通院に苦慮しているエリアに病院を作り、専門性を発揮することで、地域のお役に立ちたいと考えたのです」という理事長の言葉に使命感が漲る。

みずほ病院は4階建て。1階には各種窓口、診察室、処置室、検査室、薬局、食堂などが並ぶ。2階は血液透析センター、3階、4階は病棟で、4階にはリハビリセンターも完備している。

地域での役割

広域の患者を受け入れる
医療機関にとっての“最後の砦”

理事長と同様に砂山京子看護部長も、広域からの患者の受け入れを同院の特徴として挙げ、「石川県はもとより、富山県、福井県を含めた北陸3県、なかには福島県から来られた患者さんもおられます。入院していた病院を退院しても、何らかの事情で家に帰れない患者さんが“最後の砦”として当院に紹介されてくるケースが多いで

透析施設最前線

す」と現状を語る。患者受け入れ先としてのニーズは高く、入院ベッドの稼働率は約97%程度で推移している。

砂山看護部長によると、同院の看護方針は、「どんな患者様に対しても、その人らしく生きることが出来る努力・援助を惜しまない、そのためにはチーム医療を最大限に発揮し、地域連携の幅を広げ大きな視野で患者中心の看護を目指すこと」。この方針に則り、病棟ではスタッフが力を合わせて患者の療養生活を支えながら、医療ソーシャルワーカー（MSW）を中心に、退院後も落ち着いて暮らせる介護施設を紹介している。地域の介護施設と密に連携することで、ベッドが回転し、広域の医療機関から幅広く患者を受け入れることのできる環境が整うのである。

園谷準MSWは、「入院相談と退院支援、それに伴う関係機関との連絡が我々MSWの役割」と語る。こうした業務を行う際に重視しているのは、患者や家族にとってより現実的で無理のないプランを提案することだ。「基本的には患者さんの意向を尊重するのですが、糖尿病性腎症により目が不自由になってしまった独居の方など在宅復帰が難しい患者さんが多いのも事実です。その場合は、繰り返し話し合い、ご本人が納得できるかたちで適切な施設に入所していただくようにしています」と園谷MSW。連携している高齢者施設は15を数える。

紹介されてくる患者のなかには90代の重度腎不全患者も少なくなく、院内で看取りを行うケースも月に4、5例程度ある。こうしたこともあり、みずほ病院では終末期も含めてできるだけ患者が穏やかに生活できるよう、生活空間としての間取りを実現している。



砂山 京子 看護部長



園谷 準 医療ソーシャルワーカー

病棟の概要

平均年齢82～83歳の入院患者を対象に 透析看護プラス高齢者看護を実践

澤田清美病棟看護師長は、「入院されている方の平均年齢が82～83歳と高いこともあって、透析看護プラス高齢者看護が私たちの日常業務になっています。また、合併症をお持ちの方も多く、そちらへの配慮も必要です。近年は認知症の患者さんも増えていきますので、そうした方々にどのような看護を提供すべきか、常に話し合いながら仕事をしています」と、病棟の様子を紹介する。1病棟、2病棟ともに患者層は同じで、看護職員は28名ずつ所属。看護師：看護補助者の割合はほぼ半々である。

病棟の看護体制は、「機能別と受持ち制の混合のようなかたち」（澤田病棟看護師長）だ。基本的にはその日の指揮をするリーダーと、検温や血圧などの測定・記録を行う係、その他の業務を行うサブスタッフに分かれて看護にあたるが、これとは別に、1名の看護師が4名程度の患者を担当している。「機能別看護は効率的なのですが、やはり、受持ち制にしたほうが患者さんやご家族との関係が深まり、コミュニケーションがスムーズになります」と澤田病棟看護師長は言う。

病棟カンファレンスは毎朝15分程度行い、こうしたコミュニケーションのなかから汲み取った情報も踏まえて患者ごとの対応を検討する。必要に応じてMSWや医師にも参加してもらっている。



澤田 清美 病棟看護師長

血液透析 センターの概要

広く快適な室内を3つにゾーン分け 笑顔溢れる透析室を目指す

2階のフロア全体を占める血液透析センターには、50床の透析ベッドが3つのゾーンに分かれて配置されている。入口を入るとスタッフステーションがあり、奥に向かって右側のベッドにはオレンジ色の番号札、中央の

透析施設最前線

ベッドにはグリーン番号札、同じく左側のベッドにはピンク番号札がつけられている。こうすることで一つひとつのベッドを認識しやすくしているのだ。

血液透析センターの大豊千恵看護師長によると、午前（8:00～12:00）はオレンジのゾーンを外来患者、ピンクのゾーンを入院患者が主に使い、午後（12:30～16:30）は空いたベッドから設定し直して患者を順次入れていく。グリーンゾーンにはオンラインHDF対応の透析装置が9台あるので、その対象となる患者が使用するほか、ロールカーテンで仕切れるエリアもあり、夜間透析（17:00～23:00）ではこのエリアを利用する。35名いる看護スタッフは概ねゾーンごとに分かれて業務を行う。2013年12月には透析支援システムが導入され、よりベッド管理がしやすくなったという。

看護スタッフ以外の血液透析センターのスタッフは、臨床工学技士3名、MSW1名だ。透析部門にMSWが所属していることについて大豊師長は、「大半が透析患者さんである当院のような施設では、MSWも透析医療の実際をよく理解することが必要、という理事長の方針による人員配置です」と説明。「MSWには、介護サービスの調整、前方医療機関、後方介護施設など連携先との連絡などをすべて任せています。また、看護補助者の1人として実際の介助も行ってもらっています」と続ける。

谷内志帆臨床工学技士によると、ここでは逆濾過透析を行っているため、生菌とエンドトキシンが検出されない、最も基準の厳しい超純粋透析液を確保する必要がある。そのためエンドトキシンカットフィルターを2つ直列でつないでおり、万一、片方にトラブルが生じて、もう片方でカバーできるシステムを整えているという。「当初、透析装置の洗浄剤として過酢酸と次亜塩素酸ナトリウムを併用していたが、2年ほど前からクリネード（過酢酸系）を使用しており、1剤化した事でコスト軽減に繋がりました。本薬剤は非イオン界面活性剤が配合されており、有機物に対しても高い洗浄力を有するので効果のほどは上々です」。こうした水質管理と透析装置の設定などが臨床工学技士のメインの役割だが、時間ごとのバイタルチェックや簡単なケアなども看護師と協力して行っている。

谷内臨床工学技士は、「現在は人員不足もあって、血液データの分析・管理は臨床検査技師任せ、緊急時の対応は業者任せの面がありますが、2014年春にはさらに2名、臨床工学技士が加わることになっていますので、もう少し業務の幅を広げられると思います。患者さんの状態に合わせたダイアライザーの提案など、さらに積極的に透析医療にかかわっていきたいと思います」と意欲的だ。

大豊師長は、「私たちが目指しているのは、患者さんがスタッフに話しかけやすい雰囲気をつくること。そのためにも常に笑顔を心がけ、患者さんの訴えにはどんなことでも耳を傾けるようにしています」と話す。

障子を施し和の雰囲気を演出した窓からは河北潟ののどかな風景が眺められ、とても爽やか。室内の空気を均一に暖める空調、眩しくない照明など、患者の快適性を追求した環境も、こうした大豊師長らの活動を後押ししている。



大豊 千恵
血液透析センター看護師長



谷内 志帆 臨床工学技士



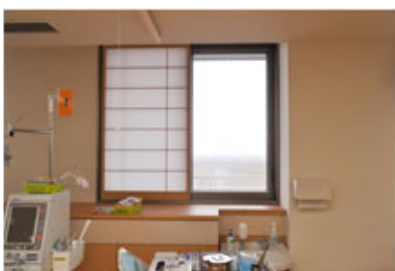
血液透析センター全景



オンラインHDF対応の透析装置は9台ある



ロールカーテンで仕切れるベッドは夜間透析などで利用



透析室の窓からも河北潟が見える



患者に風のあたらない空調で快適な室温を維持



エコーガイド下穿刺

透析施設最前線



透析ベッドはすべてテレビモニタを完備



個人用の透析装置を配した透析個室は2つある



清潔ななかに温もりも感じる血液透析センターラウンジ

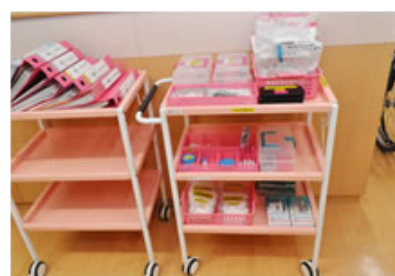
フットケア

足病変を早期発見・早期治療

切断に至る患者はほぼゼロに

フットケアは もりやま越野病院時代の2007年にスタート。現在は毎週、月曜と火曜の2日間、その日が週の初回となるすべての患者の足を看護師が観察し、カテゴリー分類を行って、爪切り、グラインダーによるケア、足浴などを組み合わせてそれぞれに合ったフットケアを計画・実施している。こうして症状のあるなしに関係なく、週1回必ず観察しているほか、普段からスタッフ皆で足の状態に気を配っているので、変化があれば早期に対応できるという。

足病変予防指導士2級の資格を持ち、フットケアに中心になって取り組んできた大豊師長は、「気になることがあった場合はすぐに医師に報告し、院内で処置をする、あるいは必要に応じて専門医を受診していただくなど早期発見・早期治療に務めています。フットケアに着手して7年目のいま、脚の切断に至る患者さんはほぼゼロになっています」と成果を語る。



フットケアの際には用具一式を並べたフゴンをベッドサイドに移動

腎臓リハビリテーション

これまでに6名に腎リハを実施し

血圧低下など効果を確認

血液透析センターでは腎臓リハビリテーション（以下、腎リハ）にも取り組んでいる。「透析患者さんは動く能力はあるのに機会を失っている人も多く、運動不足に陥りがち。かといって人工透析の時間のほかに運動のための時間を確保したり、自分で運動内容を考え継続したりするのは難しい」と考えた山口慎一理学療法士（PT）らリハビリスタッフが主導し2013年5月に開始した。対象は外来透析患者とし、2名から始めて、これまでに6名に増えている。山口PTは、「活動量が減ることによるADL（日常生活活動）の低下を予防するためには、入院が必要になるより以前の段階から介入することが有意義と考え、対象を外来患者さんに絞りました」と説明する。

腎リハの内容はベッドバイク運動、低負荷レジスタンストレーニング（腹筋、足上げなど）など有酸素運動がメイン。運動強度は、AT（Anaerobic Threshold：嫌気性代謝閾値）の50%の負荷を目安に個別に設定している。腎リハにかかわるPTは3名で、運動療法開始時には、マンツーマンで指導をし、やり方が一定程度身についたら以降は、各透析ベッドに1台ずつ設置されているテレビモニタにレッスン用の映像を映し出し、それを見ながら行ってもらう、という方法をとっている。



山口 慎一 理学療法士

約9カ月間の取り組みの成果としては、24時間血圧の低下傾向、降圧剤使用量の低減、運動耐容能の向上（6分間の歩行距離の延長）が数値で確認されている。「このほか、着替えが楽になった、階段の上り下りが楽になった、透析時間が短く感じられるようになった、といった患者さんの声も聞かれます。データ面だけでなく、このように患者さん自身が効果を実感できているのは良かったと思います」と、山口PTが手応えを語る。すでにほかの患者からも「自分も運動がしてみたい」という声が上がっているようで、患者の状態やスタッフの体制を考慮しながら、少しずつでも対象患者を増やしていきたいという。



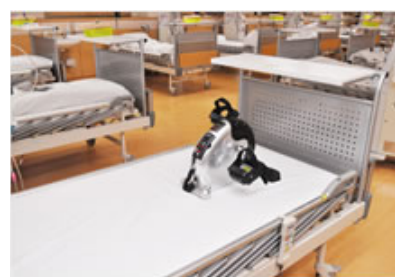
腎臓リハビリテーションカンファレンスの様子。
外来、1病棟、2病棟それぞれについて月1回ずつ行われている



4階には設備の運動機能の改善を目指す
リハビリセンターを完備



リハビリセンターの一角。壁際の装置は
全身のリラクゼーションに使用するウオ
ーターベッド



透析中のリハビリに使用するベッドバイク

チーム医療

多職種がかかわり専門的にサポート スタッフ一丸となって安全な透析を目指す

透析医療には、所属職種以外にもさまざまな専門職がかかわっている。

たとえば血液検査など各種検査データの分析・管理などを行っているのは臨床検査技師だ。「検査値の異常については我々医師が気づく以前に、臨床検査技師が指摘してくれるので助かっています」と越野理事長。3名いる検査部門スタッフの1人、伊崎良子臨床検査技師は、「2013年9月頃からはポータブルエコーを利用して透析室でのエコー下穿刺を行うようになりましたので、そのサポートも私たちが行っています」と紹介。エコー下穿刺の対象となるのは、血管が細い、狭窄があるなど穿刺がしにくい患者で、臨床検査技師は、血管を画像化して穿刺しやすい場所をアドバイスするという。現在は、看護師をはじめとした透析スタッフにもエコーを活用できるようになってもらうため、トレーニングを重ねているところ。検査部門では、今後も専門的な視点で透析医療にかかわっていく方針だ。

薬剤管理や服薬指導は薬剤師が行っている。同院では医薬分業を推進しており、外来患者に関しては院外処方ではあるが、リスクのある患者については服用している薬を透析時に持参してもらい、薬剤師が確認してその場で飲んでもらうような取り組みもしている。

松本恵薬剤師は、「血液透析センターでは週ごとに在庫を確認し、補充やチェックを行っています。また、入院患者さんについては医師の処方に応じて院内で調剤を行いますが、当院では、同じ薬剤でもさまざまな規格単位のもを扱っていますので、間違いが生じないように看護師とともに3回確認を行っています」と、日頃の取り組みを紹介する。患者が高齢であったり、重度であったりすることをふまえ、なるべく飲み方が難しくならないような処方提案もしているという。

一方、入院患者の栄養管理や、外来患者・入院患者の栄養指導を行うのは栄養部門だ。「栄養指導は基本的に医師からの依頼のあった患者さんを対象に、管理栄養士が血液透析センターに出向いて行いますが、その他の患者さんにも



伊崎 良子 臨床検査技師



松本 恵 薬剤師

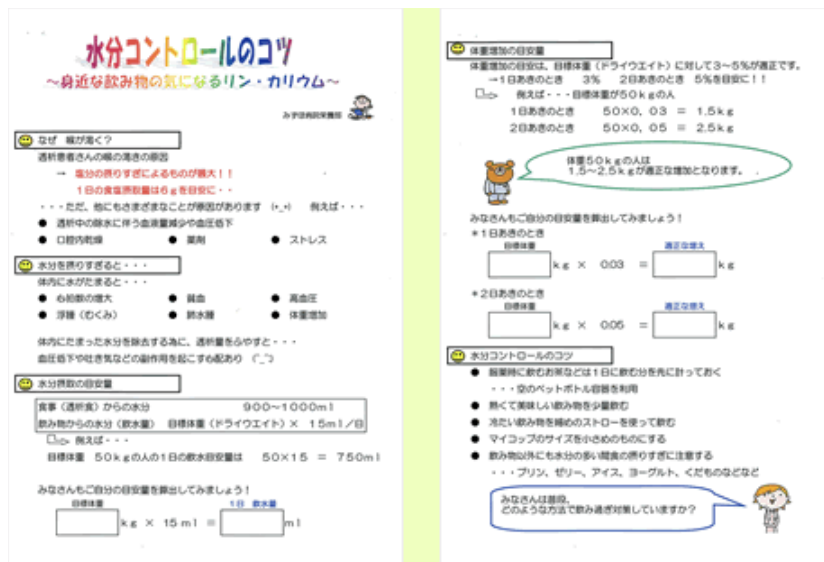
積極的に話しかけ、食事に関する困りごとを引き出し、アドバイスするようにしています」と、同院の栄養部門を一手に担う角野愛管理栄養士が言う。

栄養指導にあたっては、大きな文字と図表などを使ったオリジナルの資料を使っている。たとえば目標体重（ドライウエイト）に対する体重増加の目安量を説明する資料には、本人が計算して書き込める欄を設けたり、飲み物に含まれるリン・カリウム量は棒グラフにして比較できるようにしたり。年末にはカリウムや塩分を抑えたおせち料理づくりのコツを紹介するなど季節感も大切にしている。

こうしたなかでもみずほ病院栄養部の最も特徴的な取り組みは、地域の介護施設のサポートである。越野理事長は、「透析患者さんの栄養管理は複雑なので、その部分をサポートしないと患者さんを施設に受け入れていただくことが難しくなってしまいます。そういう意味で、いつでも管理栄養士が相談に応じるといふ姿勢を明確に打ち出し、実際にそういう場を設けています」と、サポートの重要性を強調する。



角野 愛 管理栄養士



栄養指導時に使用する栄養部が作成のオリジナルの資料。

今後の課題・展望

連携先と支え合う関係を大切に 「利用したい施設」を目指す

越野理事長は、ほかにあまり類のない幅広い地域連携を実現している秘訣として、「連携先に安心していただくこと」を挙げる。先に紹介した管理栄養士による介護施設のサポートももちろん。また、患者の紹介先に入院を受け入れてから1カ月以内に手紙を書き、患者の現在の様子を伝えることも続けている。「医療者は、自分が紹介した患者さんがいまどうしているのか、少なからず気にかけているものです。そうした心配を解消することで、また紹介したいと思っていただけ。これが信頼関係につながっていくのです」と語る。

もちろん、患者が良い状態で療養できていなければ、安心できる内容の手紙は書けないのだが、みずほ病院では、患者一人ひとりの療養環境に細かな配慮をすることで患者の心地よい入院生活を実現している。ここで言う配慮とは、たとえば同室になる患者の組み合わせを熟慮することなどである。「どんなに良い医療を提供しても、隣のベッドに気の合わない人がいたら落ち着かないのが人情です。ですから、病棟師長を中心に、患者さんの背景や人柄を考え、相性の良い人と同室にし、楽しく過ごせるよう工夫しているのです」と理事長は言う。こうしたベッド管理の工夫は血液透析センターでも同様に行っている。



ホテルを思わせる病棟個室（特別室）

細やかな気配りを重視する理由について越野理事長は、「どんな名医であっても、患者さんが来てくれなければ治せません。透析患者さんはどんなに辛くても、継続的に透析に通わなければなりません。だからこそ、治療を気持ちよく継続できる関係を築くことが大事なのです」と力説する。そして、「こうした良い関係を維持する

透析施設最前線

ためにも、関係機関や患者さんと支え合う関係を大切にしていきたい」と言う。「連携のコツをしいて挙げれば“おもてなしの心”」と越野理事長。「これからもこの心を忘れずに、職員一同、より良い透析医療の提供に励むだけです」と、専門施設としてのぶれないスタンスを語る。



屋上から見る河北潟



血液透析センタースタッフの皆さん